

令和7年度 神奈川県友好交流地域高校生派遣事業

メリーランド州派遣 記録集



令和8年3月20日（金）～3月27日（金）

（メリーランド州政府表敬訪問：州務副長官とともに）

令和7年度 神奈川県友好交流地域高校生派遣事業 日程表

月日 (曜)	発着地・滞在地	現地 時刻	交通機関	日程	その他	
3/20 (金)	京急横浜駅	7:30	京急	横浜駅集合	機内食 (車内昼食) 夕食	
	京急横浜駅発	7:43		羽田空港第3ターミナル		
	羽田空港着	8:08		到着後、出国手続		
	発	10:50	飛行機	直行便にて米国へ		
	→→ 日付変更線通過 所要時間 約12時間35分 時差 -13h →→					
	ダレス空港着	10:20	専用バス ↓ (ホストファミリー)	到着後、米国入国手続き、税関検査		
	発	12:00		バスにてアナポリスへ		
アナポリス着	13:30	州政府表敬訪問、州議会議事堂 見学				
発	16:30	バスにてコロンビアへ				
コロンビア着	17:30		市内ホテルにてミーティング ホストファミリーとともに各家庭へホームステイ			
3/21 (土)	コロンビア		(ホストファミリー)	終日ホストファミリーとともに市内視察 ホストファミリーとともに各家庭へホームステイ	朝食 (昼食) 夕食	
3/22 (日)	コロンビア発 ワシントン D. C. グリーンベルト着	9:30 10:30 17:00	(ホストファミリー) 専用バス ↓	ホストファミリーとお別れ ホテル集合後、バスにて移動 ワシントンD. C. 市内視察 スミソニアン博物館等視察 ホテルにて夕食・ミーティング ホテル	朝食 (昼食) 夕食	
3/23 (月)	グリーンベルト	9:00 9:15 15:10	専用バス	ホテル出発 高校到着、授業参加、歓迎会等 生徒とともに各家庭へ ホームステイ	朝食 (昼食) 夕食	
3/24 (火)	グリーンベルト	7:45-8:30 夕刻		ホームステイ先 各自高校へ集合 (Room 221) プレゼン及びディスカッション、授業参加等 生徒とともに下校 ホームステイ	朝食 (昼食) 夕食	
3/25 (水)	グリーンベルト	7:45-8:30 夕刻		ホームステイ先 各自高校へ集合 (Room 221) 日本文化紹介、授業参加等 生徒とともに下校 ホームステイ	朝食 (昼食) 夕食	
3/26 (木)	グリーンベルト ダレス空港着 発	7:00 7:30 9:00 12:10	専用バス 飛行機	ホームステイ先 生徒とともに登校、お別れ会 (cafeteria) 高校出発、空港へ 出国手続き 直行便にて羽田空港へ出発	朝食 (昼食) 機内食	
→→ 日付変更線通過 所要時間 約14時間15分 時差 +13h →→						
3/27 (金)	羽田空港着 発 横浜駅着	15:25 17:10頃 17:33頃	京急	入国手続き～税関検査 羽田空港第3ターミナル※から横浜駅へ ※現地出発時に第2ターミナルに変更の可能性あり 横浜駅東口到着 解散		

派遣でしか得られなかった学び

県立高等学校 1 年

私がこの派遣に応募した理由は、派遣により得られる貴重な経験が私の将来の夢をかなえるのに役立つと考えたからだ。私は中学生のころから環境問題や地球温暖化に関心があった。なぜなら各地で起きている異常気象の現状やその被害を知るにつれ、その重要性を理解し、解決したいと思ったからだ。その中でも二酸化炭素の濃度が高まっていることに危機感を覚えたので、二酸化炭素排出量を減らすことに貢献する仕事がしたいと考えている。どのような研究が行われているのか本やインターネットを使って調べたところ、二酸化炭素の排出を削減するための研究は多岐にわたっていた。二酸化炭素は様々なところで排出されるからこそ、削減のアプローチも多いのだ。そこで私は二酸化炭素を削減するには物事を多面的にとらえる視点が不可欠だと気が付いた。どうすれば多面的な視点が身に付けられるかを考えていた際に、この派遣について知った。派遣中の現地の高校生徒とのディスカッションで、アメリカでの二酸化炭素削減方法について意見を求めたり、日本とアメリカの認識の違いを知ったりすることによって、視野が広がると考えた。日本では同級生と二酸化炭素削減について議論する機会がないので、そのような経験をしたいと強く思ったのだ。派遣中は様々な人の意見を聞こうと、積極的な対話を心がけた。

派遣中、私は各国の状況やそこにいる人たちの行動背景を理解する重要性を学んだ。特に現地校のカフェテリアでの出来事が印象に残っている。カフェテリアの食事は自分の好きなものを選び、食べるというシステムだが、お昼休みの終わりが近づくと、学生たちは途中で食べるのをやめて食べ残しをトレーごとゴミ箱に捨てて次の授業へ向かっていたのだ。彼らに食べ物を捨てる罪悪感はないように思えた。私のプレゼンテーションは、食品ロスを削減し焼却によって排出される二酸化炭素を削減するという内容だったため、なんのためらいもなく食べ物を捨てる人たちの姿にショックを受けた。これでは、アメリカの二酸化炭素の排出量の中で、食品ロスから出るものは日本よりもかなり多いだろうと思った。しかし、そうした私の考えは誤りかもしれないと、現地校の生徒とのディスカッションで気づかされた。ディスカッションの際の質問で、アメリカで行われている環境問題の取り組みについて質問したところ、「この高校ではカフェテリアで出た食べ残しを肥料にしている」という意見が出たのだ。ぞんざいに捨てられていたと思っていた食べ物を、まさかそのように有効活用していたなど、思ってもみなかった。日本ではそのような話をあまり聞いたことがなかったので、有効活用しているなら、それも無駄を減らす一つの手段だと思った。また、アメリカは国土が広大であるので、ゴミを埋め立てて処理することが多い。埋め立てにも土壌の環境負荷が大きいという問題はあるものの、二酸化炭素は直接排出されない。一方、日本では、ゴミのほとんどが焼却されているため、食品ロスによって大量の二酸化炭素が排出される。食品ロスが原因の二酸化炭素排出量をアメリカと日本で比較する際に、捨てられている量だけで考えるのは、あまりにも浅薄だったと痛感した。

その国の状況や行動背景を理解せずに物事の優劣を判断すると、間違った判断をする可能性があるのだ。

これは日常生活でも起こりうる。ニュースやインターネット上の情報は物事の一つの側面を切り取ったものにすぎない。だからなぜその結果に至ったのか、どんな心理で行動をしたのかまでは理解できない。それでも人々は断片的な情報だけを受け取り、良し悪しを判断し、他人を傷つけることもある。AIの発達により情報の生成スピードは格段に速くなったので、私たちが生きる社会は情報であふれている。そのような社会で大切なのは、状況や背景を理解することだ。これからは情報をうのみにするのではなく、その結論に至る過程も重視するようにしたいと思った。これは私の目標である二酸化炭素の削減にも当てはまる。二酸化炭素の削減は喫緊の課題であるため、早期に対策を講じる必要がある。しかし、あまりにも急ぎすぎると、一時的でその場逃れにすぎない対策や、長期的には環境に悪影響を及ぼす対策につながる。国や地域の状況や、その後どんな影響があらわれるのかを考慮して、対策を講じなければならないのだ。

派遣前は、現在行われている二酸化炭素削減方法はたくさんあるので、状況は少しずつ改善するだろうと思っていた。表面の情報だけを受け取っていたので、対策が地球に負荷をかけていないか、誰かの生活を脅かしていないか、持続可能性があるのかななどを考えていなかった。派遣を通じて、表面の情報だけを鵜呑みにし、これらを多面的視点から熟考しないと誤解が生まれてしまうと学んだ。将来的にはそれぞれの環境に適していて、持続も可能な削減方法を提案し実践するアドバイザーや、その方法を編み出す研究者になりたいと考えている。アドバイスをする際には、方法のメリットやデメリット、なぜその対策が適していると考えたのかも述べるようにしたい。人間はこの地球の環境を悪い方向に変えてしまった。しかし、悪い方向に変える力があるのなら、いい方向に変える力もあるはずだと信じている。同じ思いを持つ人たちとともに、私はこの派遣で得た学びを活かして、地球を変えるために日々精進する。

自分の意見と他者の意見

市立高等学校 2年

今回のメリーランド州訪問に際しての目標および最大の関心事項の1つは、アメリカの人々が自分たちの社会についてどのような考えを持っているのか知ることであった。本報告書では、この視点に基づいて特に印象的であった経験を取り上げるとともに、その経験から私が得た学びと今後の展望を記述する。

現地高校への訪問2日目に、ホストスチューデントとともに英語、つまり日本でいう国語の授業に参加させていただいた。その日の授業では、今後取り扱う書籍に関連したトピックについて賛成、反対の立場に分かれディスカッションを行った。中でも記憶に残っているのは、「死刑制度は正当かつ必要な制度である」という主張は正しいかどうかを議論した際のことである。初めに賛成派の生徒が意見を述べた。重大な罪を犯した者には、被害者やその家族、友人の心情を鑑みれば、同様の罰が与えられるべきであるから死刑制度は必要であるといった考えであった。私はほとんど同様の理由から賛成の立場をとっていた。次に、反対派の生徒たちが、賛成派の意見に反論を述べつつ自らの意見を述べたのだが、次々に意見が発表されて行く中で、同じ反対の立場であっても、その理由には大きく二つの派閥が存在することが明らかになってきた。ある生徒は、冤罪の場合取り返しがつかないことや、死刑執行人の精神的負担への懸念など、制度上の不完全さを指摘していた。一方で、犯人を生かして死刑以上に過酷な罰を与えるべきである等、刑罰としての不十分さを主張する生徒もいた。私にとって意外であったのは、挙げられた反対理由のうち、後者のほうが前者よりも多数を占めていたことである。メリーランド州は、冤罪や人種、出身地域などによる判決の偏りへの懸念を主な理由に、2013年に死刑制度を廃止している。私は、反対派の生徒たちの多くもそれと同様の理由で反対しているのだろうと思っていたのだが、実際にはそうではないことは、全体の世論が必ずしも目の前にいる人々の考えを反映するわけではないことを再認識させ、非常に興味深く感じられた。逆に、ごく少人数での議論であったにもかかわらず、結局その後は賛成、反対の2つではなく、3つの立場に分かれてその後の議論を進めることとなったことから、実際の社会はさらに複雑な構造をしていることを強く感じさせられた。

一般的に、ディスカッションは合意形成や結論を導き出すことを最終的な目標とする。多くの人が納得できる結論を出すためには、他者の意見を尊重しあうことが必要不可欠である。しかし、これまでの自身の経験を振り返ってみると、結論を出すことを重視するあまり、自分の本当の考えに向き合う前に無難な一般論に流されてしまうことがあった。今回の授業では、結論そのものにこだわるのではなく、各々がなぜその立場を選んだのかという思考過程に注目していたことによって、他者が自分と異なる点を認識して尊重するためには、まずは自分の考えとは何なのかを深く考えなければならないことに気が付かされた。一人一人が自分自身の思考に向き合い、率直な意見を自信を持って発信することは、結果として場の誰もが自由に発言できる空気を作り出し、多様な視点からの意見を引き出し、よりに納得感のある合意につながるので

はないかと感じた。初めは想定されていなかった立場に立つことを恐れず、議論の流れに応じて自分の立ち位置を柔軟に調整し議論に取り組む生徒たちの姿勢からは、安易な同調に終始するのではなく、他者の意思同様、自分の意思も尊重することの大切さを学んだ。

アメリカの人々の考えを知るという私の試みは、今回の訪問ですべてが完結したわけではない。しかし、この限られた滞在期間の中で、国や言語にかかわらず、誰かと対話する際の重要なヒントを見出すことができた。それは、結論を急いで同調することではなく、互いの思考を引き出しあい、自身の軸を明確に持ちながら対話を続ける姿勢である。人々の考えや社会は想像以上に複雑で、一つの答えに集約されることはないかもしれない。それでも、複雑なものを複雑なものとして受け入れることで、自分の意思も他者の思考も尊ぶことができる。私は自分の意思を尊重しつつ他者を受け入れるという対話のあり方を、これからの自身の生き方や学びの場においても実践し、自分自身の世界を広げ続けていきたい。最後にはなるが、今回の訪問に際して私を温かく迎え入れてくださったホストファミリーの皆様、そして貴重な学びの機会を与えてくださった両国の先生方や関係者の皆様への心からの感謝をもって、本報告書の結びとさせていただきます。

会話から得られる学び

県立高等学校 2年

私が本事業に応募したきっかけは、昨年この事業で派遣に参加した生徒の報告を聞き、現地の高校生と交流できることに魅力を感じたからです。そこで、双方向のコミュニケーションである「会話ができること」を主な目標として、参加することを決意しました。

渡航前は、言語や生活、考え方の違いに衝撃を受けるだろうと考えていました。実際現地に到着してみると、あらゆるもののスケールが大きいことや、学校での過ごし方など、日本の生活と比較したときに、目新しいことも多くありました。しかし、私を受け入れてくださった二組のホストファミリーの方々が、どちらも中国系の方であり、日本に近い食文化をお持ちだったことや、現地校に様々な国にルーツを持つ生徒のみなさんが通っていたことなどから、日本から来た私達と現地の方々との間に、文化等の違いによる大きな壁は無いように感じました。友人たちと話していてもそれぞれの家庭に異なる生活スタイルがあるように、それぞれの個人の違いなのだと、派遣を終えた今は思います。

この派遣を通じて得られた一番大きな収穫は、原稿無しでプレゼンテーションを行うことができた点です。私はこのプレゼンテーションで、「話すこと」と「聞くこと」の2つについて、考えが変わりました。

まず、「話すこと」についてです。全4回の授業の中で、渡航前に作成したスライドと原稿を用い、プレゼンテーションを行いました。発表の最中は、私が一方的に話をしているだけで、内容や気持ちが伝わっていないような、やりきれない気持ちがありました。発表の後に発表内容についてディスカッションをしても、話し合いというよりは、聴衆である現地の生徒のみなさんに、私の質問に答えてもらうだけになってしまいました。その日のミーティングで、現地の先生から「次の授業ではぜひ原稿なしのプレゼンテーションの機会に、自分から手をあげてほしい」と勧められました。そこで、スライドを使用せずに、要点に絞って伝えることに挑戦してみました。発表した量としては、前日のほうが多いはずなのに、聴衆のみなさんの目や反応を見ながら自分の言葉で伝えたことで、より伝えたいことを伝えることができた実感がありました。また、その後のディスカッションも前日より盛り上がり、渡航前から聞きたいと思っていた「現地の生活に基づく意見」を聞くことができました。授業後に、現地の先生方や生徒のみなさんに、そのことについて自ら詳しく教えてもらいに行くことができたという事実も、目標としていた「会話という双方向のコミュニケーションを通じて学ぶ」を实践できた瞬間だったと思います。

渡航前は、英語でコミュニケーションをとることができるか不安で、自分が使用することができそうな表現を事前にたくさん調べ、メモをしていきました。しかし派遣期間中は、そのメモの存在を忘れ、帰国後に荷解きをしたときにメモを用意していたことに気づいたほど、生徒のみなさんとの会話を通じて、自然に学ぶことができてい

たように感じます。

この派遣期間を通じて、プレゼンテーション（発表）と会話（やりとり）の両方を体験できたことで、単に翻訳をしたり、原稿を読んだりしているだけでは思いが伝わらないということを実感しました。また、思いをよりの確に伝えるためにも、英語力と日本語力の両方にさらに磨きをかけ、表現の引き出しを増やしていきたいと思います。

次に、「聞くこと」についてです。現地の生徒のみなさんの積極的に聞く姿勢に、プレゼンテーションやパフォーマンスの際にはとても助けられました。発信者と聴衆の壁がないところが、発信者の良いパフォーマンスにつながっていると感じました。また、私達がプレゼンテーションをした後、それに対する質問や意見をする場面では、どの教室でも私が呼びかけた直後に手があがりました。私が普段授業や講演を聞くときには、質問をするとしても、呼びかけられてから手を挙げるまでに躊躇する時間があります。見当違いな質問をしてしまったらどうしようと過度に心配してしまうことが、理由の一つです。そんな私と現地の生徒のみなさんとの大きな違いは、「聞いている内容を自分事として捉えているか」ということだと思います。発表内容をBGMのように聞き流さずに、自分のこととして捉えているから、発信者に呼びかけられた際にすぐに発言できるのだと思います。今までは「聞くこと」を「受け身のこと」としてしか捉えておらず、聞いた内容を自分の言葉で言い換えられるほど、理解しようとしていなかったのだと思います。「丁寧に聞く」ということは、相手の真意や新たな知見に気づき、聞いたことを自分のものとして受け取ることであり、相手との交流を深めることなのだと、今は思うことができます。

メリーランド州での数日間で、様々な年代や職業の方々と接することで、会話と発表という、異なる形でのコミュニケーションを体験することができました。このような機会を作ってくださったすべての人に感謝いたします。私は今まで、国際交流に参加したことがほとんどありませんでしたが、今回の派遣を通じて、文化や言語を超えて交流することで得られる知識の豊かさと、仲の深まりを実感することができました。新たな気づきを与えてくれた国際交流に、今後はより積極的に参加していきたいと思います。これからの日常でも会話を大切にし、広い視野を持つことが、次の私の目標です。

異文化体験による学び―「対話」と「自立」―

私立高等学校 1年

私は今回の友好交流地域高校生派遣事業に参加する目標として、「日本国内とは完全に異なる環境の下での、異文化体験を通じた自らの視野の拡大」を掲げていた。その具体的な手段として、ERHSでのディスカッションで、私が学んできたフェアトレードに関する意見交換をしたり、ホームステイなどにおける生活の違いを観察したりすることを考えていた。そして結果として、思ってもいない点でも視野の拡大を達成することができた。

まず、フェアトレードに関するプレゼンテーションにおいて、生徒がフェアトレードの基礎知識を知っているだろうという思い込みにより、生徒にとってつまらない発表になってしまい、改善を試みたもののどんどん焦点のずれた発表になってしまった。それによってディスカッションも活発に行うことができず、私の目標であった意見交換と視野の拡大を、想定していたようには達成できなかった。

この失敗の原因は生徒のフェアトレード認知に関する思い込みだけではなく、プレゼンテーション及びディスカッションにおける聴衆との「コミュニケーション」を実現できなかったことと、自分がディスカッションを通じて何を得たいのか、深く向き合えていなかったことだと考える。

現地にてオガワ先生がおっしゃったとおり、英語を「うまく」扱うことはコミュニケーションにとって最大の価値ではない。むしろ、相手とのやりとりの中で何を表現するのか、中身が大切である。そういった視点が欠落し、英語をうまく話すことに囚われてしまったため、表面上成立しているだけのつまらないプレゼンテーションになってしまったのだと考える。また、その中身に関しても、自分の思考の表明にとどまっていた、具体的にどのような観点でフェアトレードについて議論したかったのか、ゴールを見失ったため、改善するプロセスを進められなかったのだと考える。この経験を通じて、「英語はツール」という馴染み深い標語を真に体験し、想定していなかった方向へ視野を拡大することができた。

ただし、水曜日のAP Classにて発表することができなかったのは、台本も、固まった方向性もなしに、英語で有効な発表ができる自信がなかったからだった。他にも、派遣期間中には、言いたいことがあるのに、どう言えば伝わるのかわからない、という場面が何度もあった。日本語だったらできたかもしれない、という経験は、ツールとしての英語をより強化する大きなモチベーションにつながった。

また、私が考えていた第二の視野拡大の手段、生活の違いの観察においては、想定通り、異文化の実感というかたちで、視野の拡大を達成できた。特に私にとって印象的だったのが、個人が家族、学校など、どのようなコミュニティにおいても「自立」していることだった。

まず、家庭内での自立について、私は洗濯を個人で行うこと、食事も一人で準備して食べることに驚いた。食事に関しては事前打ち合わせにて、個人でとる家庭もあると知っていたが、それでも当然のように個人で食事をするのを見て、体験して、大き

な衝撃を受けた。我が家でも中学生になったら家族の一員として、責任をもって家事に参加するが、家族の洗濯、家族の食事はまとめて処理する。「家族」という共同体の中での役割分担にすぎないのだ。それだから、「自分のことは自分でやる」という個人個人のスタンスが家族の間でも徹底されているのが、私には新鮮に映ったのだと考える。

学校での自立については、制度の違いが目立っていた。たとえば、生徒たちは基本的には授業は自分がとりたいものを取り、クラブにメンバーとして加入していなくても活動には少し参加したり、クラブ主催の発表会にだけ出演したりしていた。このように、制度などの枠にとらわれず、自分のやりたいことを自らの責任において行う姿勢が、私には大変「自立」しているように映った。

だが、同時に、この「自立」は、努力によって成し遂げられていることも知ることができた。ホストファミリーと子育てに関してお話させていただく機会があった。その際に印象的だったのは、「私たちは子供たちが自分で生きていくのを助けたいのだ」とおっしゃっていたことだ。実際に、家事に参加するような仕組みづくりや、運転免許を取るよう促すべきか、という悩みも伺った。それらを通じて、ただ環境が違って、人間性が違うのではなく、「自立」を大切にする文化が根付いているのだと学んだ。

それらをふまえて、今後の展望として、まず英語学習に関しては、先に述べた通り、「英語はツールである」という新たに得た視点を忘れずに、しかし積極的に取り組んでいきたい。特に、コミュニケーションのため、瞬発的に伝わる英語を話す力を向上させるとともに、時間をかけて正確な英語を書く力も怠らずに向上させたい。

また、現地で感じた「自立」の気風、周りの目を気にしすぎずに自分と向き合ってやりたいこと、しなくてはならないことをする、という心持を、日本においても実践していきたい。

そして、私の体験によって得た学びや視点を、私の言葉と行動によって、他者に伝えていきたいと強く望む。

将来、どんな大人になるべきなのか。

県立高等学校 1年

私は今回のプログラムに応募した理由として、メリーランド州派遣事業を経て、海外を知り、自分自身の視野を広げて将来につなげていく経験をしたという思いがありました。実際に派遣事業を経験した今、自分がこれから進む大学や将来の夢・職業について、より深い展望を持つことができるようになりました。このプログラムで私が得た大切なものは、大きく3つあります。

1つ目は、人とのつながりです。まずこの派遣と一緒に参加した11人の高校生のみなさんや先生方とは、素晴らしいご縁があったと思います。そして、連絡や話し合いを重ね、自分たちひとりひとりが思う社会課題について理解し合い、自分には全くなかった視点をもらい、たくさんの刺激を受けました。また、派遣先でお世話になったホストファミリーやホストスチューデントからも、多くの新しい経験をさせていただきました。これまで自分が日本で学習し続けてきた英語を生かして、人とのつながりを広めることができた感動は、忘れられないものになりました。派遣後の今でも、ホストの方々や現地でできた友人たちと連絡を取り続けることができていることを、とても誇りに思います。人生で一度しか経験できないこの派遣で築くことのできた絆を絶えずつなぎ続けて、日米間の交流を深めることに貢献する派遣団の一員としての役割を、これからも全うできるよう、努力を続けていきたいです。

2つ目は、柔軟な対応力です。派遣期間における大きなミッションとして、日本の文化を紹介することや社会問題についてのプレゼンテーションやディスカッションがありました。準備を重ねてきた中で、うまくいかないことやトラブルもありました。そのような状況で、私自身の強みと弱みが浮き彫りになったと感じます。

まず、私の強みは、準備段階で想定できたトラブルには、十分な備えや対応策を考えることができていたことだと思います。機材トラブルに備えてスライドを事前に印刷しておいたことや、パソコンのデータをクラウド上だけでなくスマートフォンにも保存しておいたことは、実際の発表時にとっても役立ちました。また、想定しておいた質問が実際に聴衆からなされた時には、自分の考えを満足に英語で伝えることができました。

一方で、私の弱みは、ディスカッションやスクリプト無しのプレゼンテーションの際に表れたと思います。質問の意図が完全に理解できないまま英語で返答してしまったり、表現したい英単語が出てこなかったときに戸惑ってしまったりすることがありました。何より悔しかったのは、考えは頭の中に浮かんでいるのに関わらず、英語でどのように伝えればよいか分からない、という状況でした。この経験を通して、英語学習により力を入れたいと思うと同時に、準備を入念に行うことは、あらゆる場面で役に立つということを再認識することができました。

3つ目は、自分自身の将来について自問することができたということです。派遣に向けたミーティングの中で、派遣団のみなさんがどのような夢をもっているのか知ることができ、そして自分でも初めて自分の将来を言語化したことで、将来自分がど

うしていききたいのかという部分が、少しずつ形になったと感じました。以前から英語を生かして国際関係の仕事をしたいという思いがあったものの、具体的な中身はなく、ただ漠然とした思いを抱いていただけでした。しかし、派遣を経て、何故自分が将来英語を生かした仕事がしたいのかが明らかになり、より自分の未来について、先述のような漠然とした思いだけではなく、より深く調べ、自分に何ができるのか知りたいと思えるようになりました。

私は英語を一つのツールとして使うことで、自分の国以外の人々と意見交換をしたり、文化交流をしたりすることに楽しさを感じます。「英語を生かすことを自分の仕事にしたい」という想いの根幹にはそうした事実があるのだと、今回の派遣を通じて気づくことができました。この先の進路選択の場面においてこの気づきは絶対的に必要で、人生の軸にもなりうると感じています。派遣が終了し帰国した今、自分にできることは、この発見に肉付けをし、将来につなげていくことだと思います。

最後に、派遣先で出会った先生から受け取ったある言葉を紹介します。

「たとえ明日世界が滅びようとも、今日私はリンゴの木を植える。」

この言葉を聞いたとき、はじめは「日々同じことを続けることの大切さ」や、「普遍性を重要視する思い」を述べているのだと解釈しました。しかし、その後この言葉を調べてみると、他にもたくさんの解釈の仕方があることを知りました。その中でも、「リンゴの木を植えたとしてその実を食べられるのは何年も先のことだが、希望を捨てず、このリンゴを食べることができるかもしれない未来の人々に今できることをしよう」という解釈が、私にとって一番腑に落ちました。私は今、この言葉の示すように、どんな未来であっても希望をもって行動ができる大人になりたいという思いを抱いています。

今回の派遣を通して得た経験・つながり・気づきを、同じような感動をもって経験することは、この先一生できないかもしれません。しかしだからこそ、そうした経験をさせていただいた私たちがすべきことは、この貴重な体験を自分自身の将来に生かすだけでなく、この報告書のように他者や次世代へと受け継いでいくことだと思います。そのために、日々の学びを大切に、どんな時も前を向いて歩んでいける人へ成長していきたいです。

挫折と自分の「生きた」言葉で伝えること

県立高等学校 1年

本プログラムは私にとって、普段とは全く異なる環境での生活体験を通して、現地の人との「違い」を肌で感じ、自分に吸収できることを多く発見するための貴重な機会になりました。今回のプログラムで、現地のエレノア・ルーズベルト高校の授業において、自身が調べてきたテーマについてのプレゼンテーション、ディスカッションを行いました。私のテーマは「将来の夢」でした。日本の中高生が将来の夢を持ちにくくなったという現状を問題提起し、私たちに最も影響を与えている教育の観点から解決策を探る、というものでした。

私はこれまで、日本の高校でのプレゼンテーションやディスカッションの授業に対し、大きな自信を持っていました。冒頭にアイスブレイクとして豆知識やクイズを取り入れたり、強調したいところで沈黙を作ったりと、特に聞き手の興味を惹きつける話し方にはこだわりがあり、常に「聞いてみたい」と思ってもらえる発表を心がけてきたからです。しかし、現地でのプレゼンテーションは、聞き手を意識した発表とは程遠いものでした。英語の原稿を時間いっぱい読み上げ、準備してきた内容を披露することに精一杯になってしまったのです。さらには、現地の生徒のみなさんからの質問に対し誤った英語表現を使ってしまい、指摘を受ける場面もありました。結果として、ディスカッションの時間も自身が投げかけた質問に答えてもらうだけで終わり、議論の発展までもっていくことはできませんでした。

この失敗の原因は、自身の英語力に対する不安にあると感じています。私は英語部で即興型ディベートに取り組んでいます。海外に行くのは今回が初めてであり、英語のみでコミュニケーションをとる環境に身を置く経験はありませんでした。本来、ディスカッションには即興性や相互のやり取りが不可欠です。しかし、英語における挑戦を恐れ、原稿をなぞるだけの発表になってしまいました。案の定現地の生徒のみなさんの反応は薄く、「自由に発言しあえるような活発な議論」を目標にしていた分、本当に落ち込みました。

反省して落ち込む一方、発表の後に現地の日本語クラスの先生から頂いたフィードバックから、私は二つのことに気がつきました。

一つ目は、「英語は意見を伝えるツールに過ぎない」ということです。私は、本プログラムでの自身の最大の課題は、英語を完璧に使えるようになることだと考えていました。しかし本当に重要であるのは「完璧であること」ではありませんでした。たとえ文法が拙くても、相手の表情を見て、その場で言葉を紡ぐこと。それが非常に重要なのだと今は思います。現地の生徒のみなさんにとっての英語は、私たち日本人にとっての日本語と同じように「話し始めることがまずは重要で、話すことができてからがスタートライン」だという当たり前のことに、ハッとさせられました。また、後

にこのプログラムにともに参加をしている他のメンバーが、原稿を見ずに発表することに挑戦する姿からも、議論の熱量を高めるために自分の「生きた」言葉で伝えることが、大きな武器になるのだという事実気がつきました。幸い、私には身近に部活動という発表活動を練習できる環境があります。あのプレゼンテーションで味わった悔しさを忘れないうちに、自分のコンフォートゾーンを押し広げる挑戦を、今後は重ねていくつもりです。

二つ目は「大事なものは何を伝え、どう聞き手の興味を引くかである」ということです。特にディスカッションは、スピーチやプレゼンテーションよりも、意見や質問の掛け合いを通して、提起された問題への理解を互いに深め合うことがメインになる活動です。だからこそ、誰に対しても同じ発表をするのではなく、聞き手が何に興味を引かれそうかを考える準備もより必要だと感じました。例えば聴衆に問いかけるとき、今回の私の発表では、「日本の」授業に関する「日本の」現状についての問いがほとんどでした。確かに私が解決したいのは「日本の」問題ですが、それ以前に聴衆はアメリカ人の生徒です。彼らにまず議論に参加してもらうため私がすべきだったのは「アメリカでも似たような問題があると感じますか？」というように、聞き手によりそった質問をすることだったのです。その方が、より議論を自分事として捉えてもらいやすいのです。

興味を引き出すということは、普段から自分が発表を行うときに大事にしていたことそのままのことですが、今回の私の失敗経験の本質を突くものでもあり、強く心に響きました。この経験から私は、英語学習において自分一人が語るスピーチだけでなく、対象である聞き手を意識する必要があるディスカッションにも取り組んでみようという意欲が増しました。

発表の失敗からブラッシュアップすることは、日本国内にいてもできることです。しかしながら、その「失敗から学ぶ」という経験を、文化や価値観、言語が異なる海外でしたからこそ、「興味を引き出すということが、間違いなく聞き手をディスカッションに惹きこむ鍵になる」、という事実を、改めて衝撃を受けたのだと思います。

最後に、本プログラムの実施に携わってくださった皆様、そして現地で私を温かく迎え入れ、未熟な私に真摯に向き合ってくださいましたエレノア・ルーズベルト高校の先生方と生徒の皆さん、ホストファミリーの方々に、心より感謝申し上げます。この一週間で得た衝撃と教訓を糧に、一步一步、着実に自分の世界を広げていきたいと思っています。

日本を外から見つめたとき

私立高等学校 2年

私は令和7年度神奈川県友好交流地域高校生派遣事業に応募するにあたり、「日本の外に出て、自分の世界を広げたい」という思いを最も強く抱いていた。日本とは大きく異なる多文化共生の国であるアメリカで、多様な背景を持つ人々がどのように共に生活し、学び、意見を交わしているのかに興味があった。また、異なる文化や価値観に触れることで、自分の視野がどのように変わるのかを確かめたいと考えていた。

メリーランド州での1週間は、私にとって「多文化共生のリアル」を全身で体験する時間であった。初日に訪れたメリーランド州議会議事堂では、ガイドの方の説明を受けながら州の成り立ちを学ぶ中で、特に多くの女性の存在が強く印象に残った。独立戦争や奴隷制度の歴史、解放運動、政治参加の過程には、白人・黒人といった人種や性別を超えて、多様な人々が声を上げ、社会を変えようとしてきた姿があり、だからこそ、現在の多様性につながっている。その歴史の重みを知ることで、メリーランドという州が「多様性の中で築かれてきた場所」であることを強く実感した。

また、偶然行われていた下院の議会を見学した際には、議場の雰囲気そのものに驚かされた。女性議員や若い議員に加え、子どもを連れて議場に入る議員や制服姿の高校生の姿も見られ、政治が人々の生活と地続きになっていることを実感した。このようなメリーランド政府の現状と比べ、日本では若い議員や女性議員を見る機会は少ないと個人的には感じる。それだけでなく、私自身も議会を直接見学した経験がなかったため、政治を生活から離れた存在として捉えていたのかもしれない気がついた。そのため、メリーランド州議会で多様な議員が活躍する姿を目にしたことは、政治のあり方を外側から見つめ直す視点を与えてくれたという点で、私にとって大きな刺激であった。外国の政治の現場を生で味わったからこそ、日本の政治現場との違いに気づくことができ、日本という国を外側から眺めることの重要性を意識するきっかけとなった。

エレノア・ルーズベルト高校での3日間の交流では、さらに深く「多文化共生のリアル」を感じることができた。アメリカの高校生にとっては当たり前の日常であっても、生徒たちはそれぞれ異なるルーツを持ち、違いを自然に受け入れながら生活していた。日本では一般的に全員が統一の制服を着ることが義務付けられ、周囲と異なる振る舞いや選択が目立ちやすく、個性を自由に表現しにくい雰囲気があるように感じる。そのため、文化的背景を含めた個々の多様な違い、個性は日常の中で表現されにくいと思う。だからこそ、異なるルーツを持つ生徒たちが互いの違いを自然に受け入れながら生活している様子は、私にはとても新鮮で魅力的に映った。特に印象に残っているのは、同校の恒例イベントであるSpirit Weekである。その中でも私が最も記憶に残っているのがCulture Dayである。この日は生徒が自身の文化に関連したものを身につけたり、伝統的な衣装を着たりして登校する日であった。実際に登校すると、インドにルーツを持つ生徒はサリーを着ており、韓国にルーツを持つ生徒はチマチョゴリを身につけていた。私は日本とスリランカのハーフだが、日本で育つ中でスリラ

ンカの文化に触れる機会がほとんどなく、自分自身の中にあるもう半分のルーツをどう大切にすればよいのか分からないまま過ごしてきた。だからこそ、生徒たちが自分の文化に誇りを持ち、堂々と表現している姿を目の前にしたとき、「違いこそが価値になる」空気に触れたように思う。学校という教育の場がCulture Dayのようなイベントを設けることで、生徒が自分らしさを堂々と表現できる環境を意図的につくり、多文化共生を支えているのだと実感した。

今回の派遣を通して、私は二つの大きな学びを得た。一つ目は「日本を外から見ることの大切さ」である。メリーランド州での政治や社会のあり方に触れたことで、政治が市民の生活にどのように根付き、どのように開かれているのかを実感した。こうした経験は、日本で暮らす中では気づきにくかった視点を与えてくれ、日本の社会や政治をより客観的に捉えるきっかけとなった。二つ目は、「国際政治への興味」がさらに深まったことである。メリーランド州の歴史や多様性に触れる中で、国際政治が人々の価値観や日常生活に深く影響していることを改めて感じた。現地でその一端に触れられたことは大きな刺激となり、今後も世界の動きを自分ごととして捉えながら学びを深めていきたいと思うようになった。

今回の派遣で得た経験は、私の視野を確実に広げてくれた。ここで得た学びを大切にしながら、これからも世界と向き合い続けたい。最後に、本派遣事業を通して得られた貴重な経験と多くの出会いに心より感謝し、本実施報告書の結びとする。

私の学びの始まり～英語で学んだ母子支援の現状～

市立高等学校 2年

私のメリーランド州派遣での目標は、現地の方との会話を通して英語で話す自信をつけること、そして実際に英語を使うことで自分の英語力を高めることでした。さらに、ディスカッションや現地での体験を通して、メリーランド州の福祉制度、特に母子支援について理解を深め、日本との違いを考えることも目的としていました。

派遣初日、空港でスタンバイパスのトラブルに直面した際は不安でしたが、無事に飛行機に乗ることができ安心しました。初日に見学したメリーランド州議会議事堂のロタンダは、天井の高さと光の美しさが印象的で、実際の議会の様子を間近で見られたことで、驚きと親近感を覚えました。

最初にお世話になった家庭では、たくさんの料理をふるまっていただきましたが、量が多く食べきれないときに英語でどう伝えるか悩みました。結局、もう一人の派遣生徒が「満腹で食べきれないが、料理は全部おいしかった」と伝えてくれ、この経験から改めて意思疎通を図る難しさを実感しました。

彼とはエリコットシティにあるHoward County Historical CenterやEllicott City Colored School、B&O Ellicott City Station Museumなどたくさんの博物館を訪れました。これらの施設では、街特有の問題である洪水の歴史や被害について学ぶことができ、地域全体で災害への意識を高めようとする姿勢が見られました。また、施設にはスロープや広い通路が整備されており、誰もが利用しやすい環境づくりが重視されていると感じました。

スミソニアン博物館では、宇宙服や動物の標本を間近で見ることができ、教科書では得られない迫力と歴史の重みを体感しました。実際に触ったり動かしたりできる展示が多く、これらの工夫からは、年齢や背景に関係なく学びや発見を体験できるよう配慮されていることが分かり、文化や歴史だけでなく、学習や社会の仕組みに対する価値観にも触れることができました。

エレノア・ルーズベルト高校での生活では、また別の家庭にお世話になりました。そこでは家族と一緒に英語で会話することを大切にくださり、私が理解できない表現があると簡単な英語に言い換えて説明してくれるなど、実践的に英語力を伸ばす機会を得られました。

学校でのディスカッションでは、英語での質問を聞き取れなかったり、自分の考えをうまく表現できなかったりして焦る場面もありましたが、挑戦しながら発言することを意識しました。その中で、私はメリーランド州の母子支援制度であるWIC (Women, Infants, and Children) について紹介しました。WICは低所得の妊婦や乳幼児に栄養支援を行う制度で、対象食品を引き換えることができるeWICカード（電子給付カード）を使用します。現地の生徒に尋ねたところ、この制度の認知度は必ずしも高くないことが分かったと共に、カードの使用に恥ずかしさを感じる人もいるのではないかといい自分では気が付かなかった意見も貰うことが出来ました。

一方、日本の母子支援の現状について話すと、すべての妊婦に支援が届いているわけではなく、市区町村に申請する必要があることや、栄養や食糧面での支援が不可欠であることなど課題が明らかになりました。これらを比較すると、日本とアメリカの両方で支援制度の知名度が十分ではなく、まず多くの人に制度の存在を知ってもらうことが母子の健康を守るために重要であると感じました。

その解決策として、現地の生徒からはSNSでの発信、病院での案内、公共の場へのポスター掲示などの意見が出ました。特にSNSは、本人だけでなく家族にも情報を届けることができるため、支援を必要とする人に広く知ってもらう有効な手段だと考えました。

ディスカッションを通して、母子支援制度は単に制度が存在するだけでは十分ではなく、対象となる妊婦やその家族に制度を確実に知ってもらう事が最も重要だと感じました。支援の内容や方法を、分かりやすくかつ広く伝えることが出来れば、母子の健康や生活の質を守ることにつながり、地域全体の福祉向上にもつながると思います。

今回の派遣を通して、私は英語に対する苦手意識を大きく減らすことができました。以前は自分から話しかけることに不安がありましたが、挑戦しながら伝えようとする姿勢が何よりも大切だと実感しました。語彙が不足していても、言い換えや工夫を駆使することで意思疎通が可能であり、その経験を通してホスト生徒とより深く関われたことが嬉しかったです。

今後は、看護師・助産師を目指す中で、今回学んだ課題意識を活かしたいと考えています。高校での授業や、またその先の大学において、制度や福祉の知識を確実に身につけ、医療現場で働く際には患者一人ひとりに必要な情報を適切に伝えられる看護師・助産師になることを目指します。また、日本人だけでなく海外の方にも寄り添えるよう、英語や他言語の学習も継続していきたいです。

今回の派遣は、英語学習や国際理解の「始まり」にすぎないと実感しました。困難に直面しても、挑戦し続けることで少しずつ成長できると確信し、これからの学びや国際交流に生かしていきたいです。

参考文献

eWICカード（電子給付カード）

chrome-

extension://efaidnbmninnibpcajpcgclclefindmkaj/https://www.health.ny.gov/prevention/nutrition/wic/ewic/docs/ewic_guide_japanese.pdf

メリーランド州派遣に参加して ―共生すること、そしてコミュニケーションの価値

県立高等学校 2年

はじめに、神奈川県友好交流地域高校生派遣事業（メリーランド州派遣）に携わっていただいたすべての皆さまに、心から感謝申し上げます。

私が本事業への参加を通して得ることができた知見は、計り知れないほど大きいものでした。不安と期待を抱えながら日本を発ってからの8日間は、すべてが新鮮で、すべてが刺激的でした。

特に印象深かったこととして、コミュニケーションの活発さがあります。空港に降り立ってすぐ、まったく無関係のバスドライバーが「北海道に留学したことがある！」と話しかけてきたこと。街中で、老紳士にホストファザーが洋服を褒められ、しばらく立ち話をしていたこと。ほとんどの人が店員さんに感謝を述べていること。エレノア・ルーズベルト高校で学生からひっきりなしに「日本語を教えてください！」「SNSを交換しよう！」と話しかけられたこと。空港の保安検査で、職員がカタコトの日本語で「こんにちは」と話しかけてきたこと。空港内の免税店でレジの店員さんに「どこの国から来たの？」と話しかけられたこと。どれも日本では多くは見ない光景の数々であり、驚いたと同時に、見ず知らずの人に話しかけられると、なんだか歓迎されているような気持ちにもなったことを強く覚えています。気軽に話し掛けることが当たり前、まずは話してみる―そんな空気感が自分にはどこか居心地がよかったように感じます。

思うに、こうした文化は、「サラダボウル」とも表現される多民族国家ならではの側面なのではないでしょうか。多様な出自・バックグラウンドを持つ人々とともに生きる、そうした共生社会で培われた人々に根付く包容力や躊躇せず他者を知ろうとする意欲は、今の日本に求められていることのようにも思われました。

一方で、そうした多文化・多民族国家ならではの、文化や価値の違いに衝撃を受けることも少なくありませんでした。飲食店で退店時にテーブルの食べかすを拭くなどして片付けようとしたところ「それをやる必要はない」とホストファミリーに言われ、戸惑ったことがありました。また、スクールランチや外食でも、食べ残しをあまり気にしていないという点も文化の違いを大きく感じた部分でした。また、赤信号であっても、交差点では右折してよいというルールもまた、驚きに満ちたものでした。

日本のことを考えてみれば、私たちは、マナーを守らない訪日外国人を見ると、「どうしてマナーを守れないのだ」と、つい眉をひそめてしまいがちです。郷に入っては郷に従えということわざが示す通り、確かに新たな土地ではその場所の文化を尊重し、従うことが求められます。しかしながら、今回の経験を通して、理解に助けを要する異文化もあることを痛感した身としては、異文化理解の助けとなるようなコミュニケーション、つまり、言語によって文化やその背景を教える姿勢もまた、私たちに必要なことなのではないかと感じます。

もうひとつ印象に残っていることとして、教育の在り方の違いがあります。訪問し

たエレノア・ルーズベルト高校での授業は、そのほとんどがパソコンのみを使用するものでした。パソコンを全面的に使用することだけが優れているとは思いませんが、使用機会が多い点で、生徒のＩＣＴスキルは日本と比べ少しばかり高いような気がしました。また、これは派遣終了後に同校の生徒から聞いたことですが、アメリカでは文理の区別がなく、進路は専攻分野ごとに選択していくことが多いそうです。大きな枠組みに囚われることのない、自由度の高い進路選択の在り方というのは、とても新鮮に感じられました。

研修の全体を通して、違うことを単にそのまま受容するのではなく、その背景や違いが与える影響など、自分の視点を持ちながら考えることが少しずつできるようになってきていると感じます。

エレノア・ルーズベルト高校での交流をコーディネートいただいた先生や訪問団団長の先生の話にもあったように、この交流が長い国際交流のはじまりに過ぎないと思うと、高揚感で満たされます。今回得ることができた知見を咀嚼・反芻して自分のものにしていくとともに、こうしたお金だけでは得ることのできない貴重な機会を、自分のみならずより多くの後輩たちに経験してもらおうべく、普及活動にも尽力していきたいと考えています。最後にはなりますが、派遣事業という貴重な経験を得られたこと・ならびに、この研修を通して多くの出会いがあったことに感謝しながら、本実施報告書を結びます。

伝えるということ

県立高等学校 2年

今回、教育特使生徒としてメリーランド州を訪れて、私が最も強く感じたことは、「伝えるということ」の大切さである。

出発前の私は、自分の英語に自信がなく、「正しく話さなければならない」という思いにとらわれていた。また、「言わなくてもきっと分かってもらえるだろう」という考えをどこかで持っており、自分の意見を伝えることに対して、自分の意見を正しく伝えられるか、そして相手がどのように思うか不安で、あまり積極的でなかった。そのような中、現地の高校で授業に参加した際、ある先生が「この学校の生徒には、言葉でしっかりと伝えないとわからない」と言っているのを聞いた。その言葉を聞いたとき、私はハッとした。日本では、暗黙の了解や阿吽の呼吸といった、言葉にしなくても相手の考えをくみ取る雰囲気を感じることがある。しかし、それは必ずしも世界共通ではなく、むしろ自分の考えや気持ちを言葉にして伝えることが前提となっている社会もあるのだと気づいた。

実際にアメリカの授業では、静かになる瞬間が少なく、生徒たちは常に自分の意見を発言し、活発な意見交換が行われていた。今回訪れた現地の高校では、話している生徒が多くて先生が困っているというイメージを持った。また、発言の際は、私の高校では、多くが挙手制ではなく、先生が生徒を当てる。それに対して、現地の高校では、生徒も先生もそれぞれが自分の考えを、自らはっきりと述べていた。時には意見が対立する場面も見られた。そこで、意見や感情を率直に伝える文化の中では、言い合いや衝突が起こることもあったと知った。しかし、それは決して思いやりや協調性が欠けているということではなく、互いを理解し合うために必要な過程であると感じた。素敵だと思った。

このような環境の中で、私は自分自身の考え方を見つめ直すことになった。これまでの自分であれば、前述のように、英語という大きな壁だけでなく、「自分の発言を相手がどのように受け取るか」ということを考えすぎてしまい、発言することをためらっていたと思う。しかし、実際に現地で生活する中で、「きっと相手は分かってくれるだろう」という甘い考えが通用しない場面に何度も直面した。その経験から、自分の意見や気持ちは、自分から、言葉にして伝えなければ相手には届かないのだと、強く実感した。そして途中から、意識して実践することができたと思う。

また、英語でのコミュニケーションにおいても、大きな気づきがあった。それは、文法や発音が完璧でなくても、自分の思いを伝えようとする姿勢があれば、相手は理解しようとしてくれるということである。これは、一緒に派遣された仲間から学んだことだ。単語をつなぎながらも、身振り手振りを使って一生懸命に話すことで、相手が耳を傾けてくれたり、会話が続きたりする経験を何度もした。この経験を通して、英語を「1つの教科」ではなく「自分の思いを伝えるための手段」として考えるようになった。

さらに、この派遣を通して、アメリカに住んでいる人の考え方や価値観に触れ、それを吸収することで、自分自身の成長を実感することができた。自分の意見を積極的に伝えることの大切さだけでなく、相手の興味を引きつけるプレゼンテーションの工夫や、自分の力で考え、判断することの重要性など、多くの学びを得ることができた。

今回の経験は、私にとって「伝えること」の意味を大きく変えるものであった。私は「現地の人の考え方を知り、吸収する」という、事前学習で立てた目標を達成する

ことができたと思う。そして「患者と密接な関係を築ける医者になる」という将来の夢に少しでも近づけるように、今回学んだことを活かし、コミュニケーション能力を向上させて、成長していきたい。

最後に、今回の派遣事業を実現するにあたり、支えてくださったメリーランド州の州政府の方々やホームステイを受け入れてくださった姉妹州委員会の方々、神奈川県教育委員会の方々、学校の先生方、エレノア・ルーズベルト高校の先生方、生徒の皆様、受け入れてくださったホストファミリーの方々をはじめとする、すべての方々に心より感謝申し上げたい。

私を変えたアメリカでの一週間

県立高等学校 1年

私は今回、アメリカのメリーランド州で一週間の交流派遣事業に参加しました。出発する前、私はとても不安でした。英語できちんと会話ができるのか、自分の言いたいことをうまく伝えられるのか、心配でした。もし相手に伝わらなかったらどうしようとか、相手の話していることが分からなかったらどうしようなどと考えて、少し怖い気持ちもありました。しかしその一方で、日本とは違う文化や生活を実際に体験できることはとても楽しみでもありました。そのような、不安と楽しみが入り混じった気持ちでアメリカに行きました。

アメリカに着いて、最初に経験したのは入国審査でした。団体で行動していたけれど、審査は一人ずつだったのでとても緊張しました。何ドル持っているかや、食べ物を持っているかなどを質問され、頭の中で一生懸命英語を考えながら答えました。そのときはすごく緊張していて、うまく言えているか分からなかったのですが、なんとか自分の言葉で伝えることができました。その瞬間、とても安心すると同時に、大きな達成感を感じたことを覚えています。そして、自分の英語に少し自信がつき、本当にアメリカという地に來たことを実感しました。

その後にバスで移動しながら見た景色は、日本とは全く異なるものでした。空がとても広く、道路も大きく、建物も高かったです。家も一つ一つが大きく、その見た目も日本とは異なるように感じられました。まるで映画で見たような景色が広がっている現実に、とても驚きました。また、最初に食べたサンドイッチもとても大きく、量も多かったので、日本との食文化の違いを感じることができました。このような小さな場面を感じる日本との違いは、私にとってとても新鮮でした。

現地校での生活も、大きな経験となりました。授業の中で話される英語はとても速く、全てを理解することは難しかったです。聞き取れることができない場面も多く、自分の英語力の不足を痛感しました。そのとき、少し後悔はしましたが、同時に「これからもっと頑張ろう」と思うこともできました。

現地校の生徒たちはとてもフレンドリーでした。初めて会った私たちにも気さくに話しかけてくれ、「どこから來たの？」や「日本はどんなところ？」など、質問もたくさんしてくれました。そのおかげで、すぐに仲良くなることができました。日本と違い、初対面でも人と人の距離が近く、自分の考えをはっきり言うところが、とても印象に残りました。

この派遣期間で特に印象に残っていることは、日本とアメリカのボランティアについてプレゼンテーションをしたことです。英語で自分の考えを発表することはとても難しく、緊張で当日はうまく伝えられているのか不安でした。しかし、聴衆役である生徒のみなさんは真剣に、うなずきながら聞いてくれました。さらに発表後には、たくさんの質問や意見を、私にぶつけてくれました。プレゼンテーションやその後のやりとりを通じ、自分の意見を持ち、それを伝えることや、間違いを怖がらずに表現することの大切さを学びました。また、アメリカではボランティアが人々の生活の中に

自然に存在していることも知り、そこにも日本との違いを感じました。

現地校では、日本文化を紹介する活動も行いました。現地の生徒のみなさんに、書道や折り紙を体験してもらいました。私にとっては普通のことでも、現地の生徒のみなさんにとってはとても新しく面白いものだったようで、とても楽しそうに取り組んでくれました。そうした彼らの様子を見て、日本の文化の良さを改めて感じると同時に、自国のことをより良く知り、伝えていきたいと感じるようになりました。

ホストファミリーとの生活も、とても大切な思い出です。一緒にサッカーの試合を見たり、ご飯を食べたりする中で、言葉は完璧でなくとも、気持ちは伝わるのだということを感じました。うまく言葉が出てこないときもありましたが、ジェスチャーや表情を使って伝えようとする、ホストの方々も理解しようとしてくれました。それがとても嬉しかったです。

また、ホストの誕生日にはシナモンロールを作り、友人たちも呼んでパーティーをしました。みんなで準備し、一緒にお祝いをした時間はとても楽しく、あたたかいものでした。そこには文化や言葉の壁を超えた「つながり」がありました。

そうした日常生活の中にも、文化の違いを感じる場面が多くありました。特に、食事の場面で感じるが多かった印象です。飲み物のおかわりが自由にできることや、食事の量がとても多いこと、ベジタリアンの方が多くいること。これらは、日本という環境においては、少なくとも私の周りではあまり実感しないことでした。このような違いを知ることは、自分の当たり前はあくまで日本という文化の中での当たり前であり、他の文化の中では当たり前ではないという事実を、私に教えてくれました。

この一週間の交流派遣事業を通して、私は自分が少し成長できたと思います。英語の力だけではなく、自分から行動することや、新しいことに挑戦する勇気も学びました。最初はとても不安でしたが、一歩踏み出したことで、自分の世界が広がったと感じます。

これからは、この経験を大切に、英語をさらに勉強していきたいです。そして、自分の意見を持ち、それを相手に伝えられる人になりたいです。また、今回出会った人たちとのつながりも大切にしながら、これからも様々なことに挑戦していきたいです。